

第132号

副会長挨拶
三教研に望むこと
学校自慢（知立支部）
支部トピックス（北設支部）
教室の窓から（刈谷支部）
私の研究（高浜支部）
研究大会の報告・調査委員会報告
授業力養成講座・教育講演会
教育随想

教育



つながりを大切に、

学び続ける教師に

三河教育研究会 副会長 加藤 応子



やわらかな日差しが心地よく感じられる季節となりました。
令和二年度は、コロナ禍のため、三河教育研究会の多くの研究大会及び研修会が、延期または紙上発表となりました。残念な思いでいっぱいですが、先生方も新たな視点で自己研鑽を積み重ねてみえるかと拝察いたします。

このような中、十月・十一月には、豊橋地区と碧南・西尾地区のお力添えにより授業力養成講座が、さらには、豊橋地区のご協力により、スポーツジャーナリストの中西哲生様による教育講演会が行われました。コロナ禍のため、教員同士が学び合う場も少なくなりましたが、両方の研修からたくさんの方の新鮮な学びと元気が勇気をいただきました。私には、一筋の希望の光と申しましょるか、今も昔も変わらない、学びの尊さを実感した貴重な場となりました。関係の皆様、運営等で支えて下さった皆様方には、心より御礼申し上げます。

学ぶことは喜びであり、教員ならば、誰しも人とつながり、生涯学び続けたいと思うものです。コロナ禍ではありますが、コロナ禍の今、深く追究すべき課題に出会いました。ICT機器の活用です。

ICTには全く無縁な私ですが、高浜市では、今年度、全児童生徒、全職員にタブレット端末が配付され、各教室に電子黒板が導入されました。市のご配慮に感謝し、活用しないわけにはいきません。そこで本校では、知識のある教員らが率先し、活用法を全職員に配信し伝授してくれました。それを受け、教員同士が学び合い、公開授業をはじめ日常的にタブレットを活用した新しい授業風景が見られるようになりました。例えば、社会科では、コロナ禍で訪問できない地域の瓦工場に、リモートで工場見学をさせていただいたり、体育科で互いの動きを動画で撮影して助言し合ったり等々。児童の意見や作品等も、電子黒板に一覧にして映し出すことは日常的となり、授業参観で、タブレットを使って自己紹介をした一年生の姿に保護者の方々は大喜びでした。様々なアプリやツールを用いた教科の授業は、日々進化しています。児童の理解も早く、「こんな使い方もできるよ」と、新たな使い道を教員に教えてくれる子もいます。教員の主体性と、ともに学び合う姿、児童同士がタブレットを基に楽しく学び合う姿等、ICTのもたらす様々な効果に驚き、無限の可能性に思いを巡らせるばかりです。

コロナ禍で、人とのつながりの大切さが見直されています。ICT導入により、教員も児童も学び合い、つながり、ともに成長する姿に、明るい未来を感じます。学び続ける教師であるために、人とつながる学び合いを大切にする三教研にて、今後さらに研究が進みますよう願います。

「？」から「!」、

新たな「？」への楽しさ

三河教育研究会 副会長 松平 貴圭



ジブリ映画の『となりのトトロ』には、こんなシーンがあります。父親と二人の姉妹が引越しをする田舎の家に到着すると、引越しとこれから住む家の物珍しさからか、姉妹はずいぶんはしゃいでいます。しばらくして、父親は二人に「さあ、仕事、仕事。二階の階段は、いったいどこにあるでしょうか。階段を見つけて、二階の窓を開けましょう」と声をかけます。すると、姉妹の表情は驚きにも喜びにも見える表情に変わります。

そして、二人は競争するかのよう走り出し、嬉々として階段を探し回ります。扉をいくつか開けたり閉めたりしていくうちに、階段がありそうな「扉を見つける」ときは階段の位置を予測し、「扉を開ける」のはその予測が正しかったのかを検証することにつながります。「扉を開ける」のは予測の誤りを判断して、「別の扉を探す」ときは次を予測するといった試行錯誤が続きます。父親は、どうして階段の場所を姉妹に伝えなかったのでしょうか。「あそこに階段があるから」と場所を伝えれば、迷うことなく階段を上がり、二階の窓を開ける目的は短時間で容易に達成されたはずですが。

私たちは、子どもたちが迷ったり、間違ったり、失敗したりすることを「できれば無ければよいもの」と考えてしまいがちです。そのことが、子どもたちの貴重な「経験や学び」を省略してしまっていることも多いのかもしれない。

本校は、二〇一九年度ソニー子ども科学教育プログラムにおいて最優秀校に選ばれ、令和二年度子ども科学教育研究全国大会を開催する予定でした。新型コロナウイルス感染症の影響により、予防対策を講じた形での開催を模索してきましたが、参観者を募っての開催は中止となりました。理科部を中心に「どうしても解き明かしたい」「どうしても達成したい」という思いを生み、問題解決的な学習過程を重視した実践に取り組んでいます。やり方が決まっていって、その通りに進めて予想通りの結果を出す実験よりも、子どもたちが問いや解決方法を考えていく方がわくわくします。全ての単元や授業でこの方法を行うことは難しいですが、どの教科においても、知的好奇心を高め、子どもの力を信じて任せつつ、探究活動を促していくような機会をつくっていききたいものです。自分が知っていた「？」があつて、試行錯誤をして「そういうことか」という「！」が生まれ、また新たな「？」につながります。子どもたちが長時間熱中するRPG（ロールプレイングゲーム）での、自分のレベルに合わせて、自分のペースで探索できる面白さも、こんなところにあるように思います。

三教研に望むこと



三教研ホームページの

充実を

豊田市立藤岡中学校

成瀬修司

令和二年度は、元年度の終わってから続く新型コロナウイルス感染症の拡大が収まらず、ほとんどの学校が臨時休校でのスタートとなりました。そして、休校中のネットワークの活用が喫緊の課題として浮かび上がってきました。

本校でもホームページの再活用について昨年度より試行錯誤していましたが、できることからスタートしようと考え、二日に一回程度、活動の様子を写真で紹介したり、配付物を添付したりしていました。それでも閲覧数は徐々に増え、保護者の方からも「学校の様子がよくわかる」「見落とした配付物をホームページで確認できてよかったです」といった言葉を聞くようになりました。三月になり、突然の休校が始まると、一気に閲覧数が増え、ホームページの更新は、ほぼ毎日となりました。休校中の学習への利用も重なり、毎日生徒数を超える閲覧数のカウントされました。その後もホームページの更新は毎日の日課となり、現在は休みの日も

思いつくままに在宅で更新しています。

また、本校は同窓会の会員が一人を超過え、会員への連絡方法が課題となっていました。それもホームページが活用できるのではないかと思い、どれだけの会員（卒業生）が閲覧しているのか調査を始めました。こちらは惨憺たるもので、調査開始四か月で十七名の回答があったのみでした。同窓会のお知らせは年に一回程度確認してもらえば、周年記念行事や会員の活躍の状況等十分伝えることができます。それで大きな経費や労力の削減になります。そこで、年に一度見てもらうことを目標に、同窓会の日を決め、その日に閲覧するよう呼びかけ、オンライン同窓会の開催も計画中です。

三教研のホームページが新しくなりました。会員はもちろん、OBの方にも様々な面で協力いただけるホームページになることを期待します。情報があふれる中から三教研のホームページを継続して見てもらうのは大変なことだと思いますが、三教研に関する多くの情報をホームページの活用で一元化できれば、多忙化や経費を削減しながら、大きな成果を上げる可能性があると思います。OBの方にも協力いただくことでこれまで培った教育的財産もさらに生かし、会員の教育力向上に役立つことと思います。

コロナ禍の先を見据えて

西尾市立西野町小学校

永井 隆

三教研の裏方の仕事をしていたのは、十年も前のこと。それまでも国語部会の常任の仕事や文集「みかわの子」の編集委員の仕事に携わり、附属小にいるときは事務局として働かせていただきました。

三河の教育を支える三教研ですが、今年度は、コロナ禍によって国語部会も大きな打撃を受けました。夏季研修会が中止になったほか、三河の作文教育の伝統を脈々と受け継いできた文集「みかわの子」の発刊も中止となりました。我が市でも文集「にしお」の作品募集が見送られたことを考えれば、やむを得ない決断だったとは思いますが、無念でなりません。

先が見えず、不安な日々が続きます。しかし、子どもたちへの教育を停滞させることはできません。こんな時だからこそ私たちは、三教研という組織のもと、各市町村の枠を越えて連携を図り、情報交換を活発に行いながら教育の推進に努めていかなければならないと思います。

苦しい経験や悲しい経験を通して、人は成長し、それを丁寧な文章にするこゝとで、生き生きとした作文が生まれます。この困難を乗り越切った先に素敵な文集「みかわの子」が再び作られることを、今は願うばかりです。

子どもたちのために

安城市立桜井中学校

高取雅史

全国一斉休校。子どもたちのいない学校は、静かで寂しいものでした。私たちの仕事は、子どもたちがいてこそ初めて成り立つということを実感しました。「早く授業がしたい」「子どもたちの生き生きとした顔が見たい」日々の忙しさに流され、忘れかけていた教育に対する情熱がよみがえってきました。

コロナ禍で、学校生活は大きな制約があります。度重なる予定変更、先のない毎日……。教員の負担も増えているように思います。しかし、「コロナ禍だからできない」ではなく、「コロナ禍だからこそ、できることを考えていこう」と教員みんなで意見を出し合い、子どもたちのために前向きに取り組んでいます。折しも、新学習指導要領の全面実施における授業改善・評価など、学校現場の課題は山積し、試行錯誤が続きます。

今、私たち教員にとって大切なことは、「つながり」だと思います。三河教育研究会は、たくさんの方の先生方の実践を基に学び合い、学校間や地域を越えた「つながり」ができる組織となっています。私たち会員全員が、研究の成果を共有し、子どもたちのために日々成長していくことが大切だと考えます。

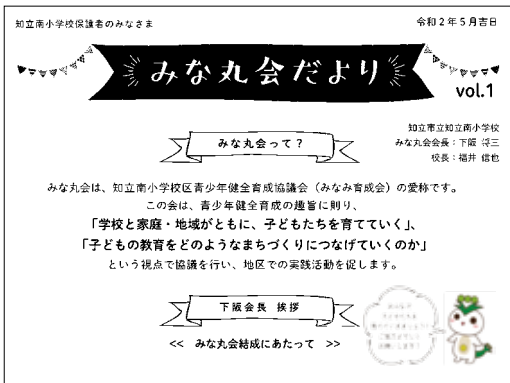


地域とともに創る学校

— 独自のコミュニティ・スクール —

知立市立知立南小学校

放課に、校舎裏の畑で土いじりをして
いると、二年生の女の子が友達と走って
きました。元気なあいさつに「どうした
と投げかけると、「ヤモリのえさを取りに
来ました」と返されました。すかさず「え
さは何?」と聞くと、「蛾だよ」と、止ま
りもせず草むらへ入っていききました。
本校は、開校から四十年を過ぎ、開校
当初はまだ、学校の周りは田畑が多くあ
りましたが、ほぼ宅地と化しました。学
区は、二本の川に挟まれた中に三町があ
り、市内では比較的自然の多い学区です。
畑や池、川、神社、そして牧場などの環
境が残るため、それらに棲む生物を教材
とした「いきもの学習」に取り組みなが
ら、命について考える教育ができるのが
本校のよさです。様々な生物の能力や特
性、他の生物とのかかわりに気づき、生
物の多様性と共生の必要性を感じ取るこ
とができ、「命の大切さ」の精神を育む
とともに、様々な主体的活動から、「自
己有用感」を育むことができると考えて



コミュニティ・スクール初回たより (一部抜粋)

います。
このような地域環境を活用し、主体性
の出発点である子どもたちの「思いや願
い」を強力に支えるためにも、地域との
連携・協働の体制が必要と考えました。
そこで、三町合同で「三世代輪投げ大
会」を行うための組織であった「知
立南小地区青少年健全育成協議会」を改
編することになりました。三町の代表から
会長を選び、組織を運営するための地域
連携コーディネーターを置き、学校評議
員、スクールガードやとーちやんの会の
代表を新たにメンバーとし、今年度から
スタートさせました。通称「みなみ育成
会」愛称「みな丸」として生まれ変わ
りました。「みな丸」とは、平成二十九
年度に全校児童の募集投票で生まれた知
立南小のキャラクターの名前です。
年間六回の会議を設け、行事や様々な
課題など突っ込んだ話し合いをしていま
す。これなら、子どもたちの「思いや願
い」を、地域を巻き込みながらみんな
膨らませる楽しい学校が実現できると信
じています。
(文責・福井 信也)

支部 トピックス



北設支部

北設楽の課題

本支部は『北設楽郡教員会』を組織し
て活動しています。一人二部会に所属し
授業研究会だけでなく「ジビエの森と
チョウザメ養殖についての講話」や「移
住定住推進活動等にかかわる講話」等、
地域講師を招き、地域の特色を生かした
研修会を実施するなど、北設楽の教師と
しての資質向上に努めています。

また、北設楽には小学校が七校あり、
そのうち五校が複式学級を有する学校で
す。複式学級では、主に低・中・高それ
ぞれで二年生の指導内容を再編成した複
式カリキュラムで授業をしています。算
数科は同じ教室で二つの学年がそれぞ
れの学習をしています。一人の教員が二つ
の授業を同時に進めることに難しさはあ
りますが、児童だけで学習を進める場面
が多くあり、主体性や自立心、共生の力



複式学級 (3年生2人・4年生4人)
算数科の授業風景 (清嶺小)

等を育む可能性を秘めています。教科の
視点に加え、複式学級の視点でも授業力
向上に努めています。
さて、平成元年度に二五四名いた教員
が本年度は一二名となりました。教員
数の減少により、一人一人への負担が増
大し多忙化へとつながっています。多忙
化は教員の精神的・身体的・時間的・思
考的なゆとりを消失させ、子どもとじつ
くり向き合うことが困難な状況を生んで
います。そこで、本会の組織や運営、活
動等を見直し、来年度から「一人一部会
(教科等部会) への所属」と「専門部会
の休部」を基本とする新しい体制で活動
することになりました。
働き方改革と研修。これらのバランス
を考えながら真に必要な研修を見極め、
効率的で効果的な研修を組織として構想
していく必要があると考えています。
(文責・清嶺小・後藤 康仁)

教室の窓から

児童の豊かな心を育む 三つの取り組み

刈谷市立小垣江東小学校
柴田 芳之

本校では、児童の豊かな心を育む手だてとして、三つの取り組みを行っています。その取り組みの一部を紹介します。

一 ふれあい活動

本校は、児童数二四七名。市内で最も小規模な学校です。そこで、子どもたちの社会性を育てるべく、「ふれあい活動」に取り組んでいます。異学年混成の十二のチームをつくり、日々の清掃に始まり、遠足、運動会、読み聞かせ、レク活動等をチームで行っています。

上級生は下級生から頼られることで自己肯定感や自己有用感を得ます。下級生は上級生を手本に、自分たちが進級したときに下級生と上手に接することができるようになります。

二 命の学習

本校は生活科や総合的な学習の時間を使って、「命の学習」に取り組んでいます。そのなかでも、小垣江ホタル会との連携による四年生の「ホタル飼育」が今年で十四年目を、学区の清水牧場との連携に

よる五年生の「子牛飼育」が二十一年目を迎えます。

命を育てる活動を通して、子どもたちは命の大切さや自分たちも食べ物から命をいただいていることを学んでいます。

三 刈谷特別支援学校との連携

二〇一八年度、敷地内に肢体不自由児のための刈谷特別支援学校が併設されました。それを機会にさまざまな交流を行っています。四月の出会いの会に始まり、ホタル飼育や子牛飼育にかかる活動と一緒に取り組んでいます。放課には、中庭で自然にふれあう子どもたちの姿が見られるようになっていきます。

これからもさまざまな交流活動を通して、立場の違いも理解しながら、共生できる児童にしていきたいと考えています。



牛の飼育から「命」を学ぶ

私の研究



体育の「越境的な学習」についての実践的研究

— 小学五年 体育授業を通して —

高浜市立高取小学校

竹内 隆二

一 はじめに

学校、学年、学級という固定された集団で繰り返し授業を行うことが、劣等感を生むことにつながり、主体的な学びを阻害すると考えました。そこで、「越境的な学習」を体育授業に取り入れ、本研究に臨みました。

二 越境的な学習とは

「越境的学習」とは自発的に組織の枠を越え、学びを求め行う学習のことです。ここでは、学生ではない方や異校種、異学年の児童を混ぜ、一緒に授業を行うことを「越境的な学習」とします。ただし、よくある年長者が年少者に教えることではありません。技能差・年齢差等に関わらず、一つの共同体として活動できるようにしました。研究については次のように進めました。

三 研究方法

①小学五年生と中学二年生による器械運動（マット運動）の授業

②小学五年生と小学一年生による陸上運動（リレー）の授業

③小学五年生とデフリンピック選手らによるボール運動（ネット型）の授業
この三つの実践から、リフレクションシート、動画や静止画、さらには筆者自身の観察記述のデータを収集しました。その中から、「越境的学習」の視点を中心に考察を行いました。

四 結果と考察

全ての実践で、積極的に対話を行う様子が見られ、①②の実践において、双方の意見が反映されるなど、情報量の増加や新たな気付きが生まれました。さらに劣等感等をもっていた子が進んで活動する姿が見られました。③の実践では、内容は異なるものの、双方において、新たな気付きが生まれました。そして、その気付きを選手らの職場で活かしたいと報告がありました。

五 おわりに

「越境的な学習」を体育授業に取り入れることで、「主体的・対話的で深い学び」に向かう可能性が考えられました。今後実践を重ね、特に年長者が学んだ「内容」について明らかにできるよう研究を重ねていきたいです。



デフリンピック選手らとの
ゲームの様子

研究大会の報告

統計教育

確かなデータにもとづいて

考える力を育てる統計教育

本年度、左記のように計画していましたが、冊子「愛知の統計教育 第三十九号」による発表・開催となりました。

愛知県統計教育研究協議会

研究発表会・講演会

※兼・東海・北陸統計指導者講習会
期 日 七月二十八日（火）

会 場 TKPガーデンシティ名古屋

◎研究発表会 提案者

知 多 知多市統計教育部会

名古屋・大坪小 浦野 光 先生

高 浜・高浜中 西尾優貴 先生

◎指導講評・講演会

講師 愛知教育大学准教授

青山和裕 先生

基調提案として、愛知教育大学の青山先生から、新教育課程における統計教育を充実させるためのポイントを提案していただきました。教科書の問題を活用しながら扱うデータ量を増やすこと、目的に沿ったデータを想定して実際に集める活動を取り入れること、真正な問題解決を行うためには教師の支援の工夫が必要不可欠であることなど、新しい時代を生

きる子どもたちを育てるための統計的問題解決の広げ方や、指導の工夫についてご示唆いただきました。

研究実践では、尾張地区から、項目を考えたアンケートを実施し、集めたデータを分析・考察することで、血液型性格判断が正しいかどうかを判断する数学科の実践。名古屋地区から、棒グラフより豊橋市外国人住民人口の増加を、円グラフより豊橋市の住みやすさに関する意識を読み取ること、豊橋市が外国人にとって住みやすい街である理由を調べる社会科の実践。三河地区から、勉強やゲームに使う時間を全国の中学生と比較することを通して、全数調査と標本調査の特徴や違いについて考察する数学科の実践がそれぞれ提案されました。どの実践も、身のまわりにある事象について、データをもとに考察する力を育てる子どもの育成を目指した提案となりました。



データカードをヒストグラムのよう
に並べている様子

保健体育

仲間とともに課題を見付け、解決しながら学びを深めていく体育学習（二年次）

令和二年度 保健体育部会秋季研修会

期 日 十月二十七日（火）

場 所 田原文化会館

◎講演 「継続する心」

講師 野球解説者・スポーツコメンテーター

山本 昌 氏

令和元・二年度 実践事例集

「新しい時代に求められる教育」

～主体的・対話的で深い学びの実現を図る授業実践～

調査委員会

三河全域の実践を一冊に

三河教育研究会では、調査委員会を中心に、諸事業の推進や、諸活動の充実を図るために主題を設定し、二年間の調査・研究活動を行っています。

令和二年度は、昨年度に決定した主題「新しい時代に求められる教育～主体的・対話的で深い学びの実現を図る授業実践～」を受け、二年間を通した各支部の実践の成果と課題を一冊にまとめた事例集を発行しました。

この事例集は、各支部の特色あるすばらしい実践を多数まとめているので、私たち教員の資質・能力のさらなる向上に結び付けていくことができると確信しています。さらに、巻頭には、愛知教育大学教授の戸田茂先生より三河教育に対する提言をいただいています。

多くの先生方がこの事例集を有効に活用されることを期待しています。

◆小学校

豊橋市立磯辺小学校 豊川市立三蔵子小学校 蒲郡市立中央小学校 新城市立新城小学校 田原市立衣笠小学校 設楽町立名倉小学校 岡崎市立岩津小学校 碧南市立棚尾小学校 刈谷市立住吉小学校 豊田市立寿恵野小学校 安城市立桜町小学校 西尾市立一色東部小学校 知立市立八ツ田小学校 高浜市立高浜小学校 みよし市立中部小学校 幸田町立中央小学校

◆中学校

豊橋市立本郷中学校 豊川市立東部中学校 蒲郡市立形原中学校 新城市立新城中学校 田原市立田原中学校 設楽町立設楽中学校 岡崎市立竜南中学校 碧南市立中央中学校 刈谷市立富士松中学校 豊田市立益富中学校 安城市立明祥中学校 西尾市立福地中学校 知立市立知立中学校 高浜市立高浜中学校 みよし市立三好丘中学校 幸田町立南部中学校



授業力養成講座

【東三河】

○期日 十月十六日（金）
会場 豊橋市立東田小学校
授業者 櫻井由梨香先生
（三年 外国語科）

講師 愛知教育大学教職大学院准教授 松井孝彦先生
受講者 二十二名

○期日 十一月六日（金）
会場 豊橋市立羽根井小学校
授業者 渡邊満佑子先生
（六年 道徳科）

講師 愛知学泉大学教授 前田 治先生
受講者 二十四名

【西三河】

○期日 十月三十日（金）
会場 碧南市立新川小学校
授業者 太田尚子先生
（五年 外国語科）

講師 豊田市立堤小学校校長 小山真司先生
受講者 二十名

○期日 十一月二十四日（火）
会場 西尾市立東幡豆小学校
授業者 神谷順子先生
（四年 道徳科）

講師 岡崎市立矢作西小学校校長 清水良隆先生
受講者 三十六名

本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、受講者の人数を制限した規模の縮小、検温・手指消毒の実施等の感染防止対策を講じた上で秋期講座のみを

開催しました。コロナ禍での開催となりましたが、すべての授業において、子どもがいきいきと活躍する姿がありました。授業研究協議会では、受講者同士が授業記録をもとに、具体的な子どもとの姿で語り合いました。講師の先生からは、子どもの捉え方や授業づくりの理論部分をはじめ、授業場面での教師支援の在り方までご指導いただきました。

受講された先生方が、各学校および地区における授業力向上の推進役となり、一層活躍されることを期待しています。

受講者の声

- ・道徳の授業では、教材によっては無理に自分事に戻す必要はないことを学んだ。行動の裏側にある気持ちなど、見えないものや心が感じたことを大切にしたい授業づくりが、子どもへの道徳性を養っていききたい。
- ・「道徳は週一回の自己更新である」ということが印象に残った。他教科の学びの質を上げるためにも道徳は重要であることを再認識することができた。
- ・英語の授業において、非言語によるコミュニケーション能力の育成の大切さを学んだ。校種や立場の違いと話し合うことで、発達段階に応じた指導方法や指導観の違いを知ることができた。
- ・英語の授業では、音読が大切であることを再認識した。発話量を確保することで、子どもが「英語が伝わった有用感」を感じられる授業づくりができていく。

教育講演会

演題『サッカーが持つ力、スポーツが持つ力』

講師 中西 哲生氏



スポーツジャーナリストである中西哲生様をお招きして開催した教育講演会。来場者数を制限しての講演会となりましたが、約二六〇名の方にご参加いただきました。

内容は、スポーツやサッカーの話題にとどまらず、かぜをひかない方法や姿勢の話、そして、生き方の話にまでおよびました。

中西様の講演の中で、いくつか印象的な内容を紹介します。

●残された時間は多くない。だから、今を全力で生きる。未来の時間を今、使わないでほしい。常に、自分自身に「この今の時間は、未来の時間を使っている」と思いながら生きている。今やるべきことを今やれば、未来の時間を使わずに済む。そこに新しいものが入っていく。

講演本編もさることながら、質疑応答の時間も濃密で、参加者から大変好評なひとときとなりました。それぞれの質問に真摯に答える姿勢が印象的で、教師として大切な心構えに通じるような話が多く出ました。

●日向より日陰みたいなどころにいると、きが、いちばん自分自身で自分を磨くチャンス。自分自身がなるべく多く失

敗してきているほうが、失敗する方法を減らせる。失敗からたくさん学べるし、同じ失敗はしない。失敗したということは自分が何かチャレンジしたということ。

中西様の熱のこもったお話により、「辛いことも楽しいことも全部味わい、自分の身を濃くすることの大切さ」について考える貴重な時間となりました。

◆参加者の声◆

●「できない理由を探すより、できる理由を探す」今の自分にぴったりだと感じた。児童に魅力的なものを伝えたいければ、まずは、自分自身の人間力を向上することがいちばん大切だと感じた。今の時間を無駄にせず、後悔のない人生を送りたいと強く感じた。夢のない人間では、夢をもたなければならぬ子どもたちに何も残せないのだからと思った。常に、日々成長できる自分でありたいと思った。

●これからの自分の生き方に参考になることばかりでした。自分のコップが上向きでなければ、他人のコップも上向きにできないと感じました。中西様の生き方は、現実を変えることができる、行動的で、前向きで、誰もが主人公であるような希望のある生き方だと思いました。勇気と熱と希望をいただきました。

教育随想

(88)

これからの社会を生きる



知立市教育委員会
教育長

宇野成佳

新作「知立文楽」を求めて

「地域にねざす したしみと にぎわいの会館」をテーマに劇場づくりに取り組む知立市文化会館（パティオ池鯉鮒）は、市制五十周年、会館二十周年記念事業として、「市民」と向き合うプロジェクト「立体パノラマ絵草紙『おさき玉城恋の八橋』」を昨年、公演しました。

演出家・木村繁氏は、「知立には綿々と受け継がれる文楽とからくりがあり、それを義太夫節で演じている。伝統的な語りを新たに創造するには、その文体や内容もさることながら、台本がどんな節や音曲で語られ、人形はどんな振りで舞うのか、新作へのハードルは高い。今回、それに挑戦できたのは、文楽座や前進座の皆さん等の培った古典の力。そして、

知立という土地の浄瑠璃語りで人形を操る稀有な風土があったから」と語られました。

この作品は、文人「八橋売茶翁」が知立にもたらしたと伝わる琉球古楽器「長線」とユネスコ無形文化遺産「知立の山車文楽・からくり」等、知立の文化遺産を題材にして、プロの役者と市民参加の群読・義太夫・文楽とが合同で演じられていました。

知立の歴史が生み育んだ特色のある文化芸術にスポットを当て、市民参加を通して地域への愛着や誇りを育てることをねらい、今後の豊かな市民生活に寄与するもので、新作への挑戦と創造によって作られた公演でした。

中学生の提案

今年度も中学三年生が議員となり、市の本会議場で「子ども議会」を開催しました。その中の一つ「新たな知立市名物の開発と販売」では、地域の商店等と連携し、「池鯉鮒ソフトクリーム」や「かきつばたソーダ」を開発して、無量壽寺や遍照院等で販売してはどうか。さらに、SNSによる拡散販売を展開し、大好きな知立市の認知度を高めたい趣旨の提案でした。具体的にソフトクリーム等のイメージ図や、市内の各名所の利用者数の

推移や実態を資料提示し、自分の考えを説明しました。生徒は知立の歴史的な財産と、それを活用した観光開発を融合させて、伝統文化の継承とそのすばらしさを広めたい思いを熱弁しました。

他にはIT環境の整備やタブレットの活用、高齢者理解、新三河知立駅周辺の開発等、身近な生活問題から市の将来を考えた内容でした。コロナ禍の中、将来の住みやすい社会を想像し、生活の中から課題を発見し、その解決策を考え、提案している生徒たちの姿は頼もしく見えました。

これからの社会と教育

知立市は百年に一度のまちづくりに取り組み、知立駅付近立体交差事業を進め、十か所の踏切が無くなります。人や物の流れがさらに円滑になり、一段と人とのつながりが大切になってきます。また、高齢者や外国人の増加等により、人によさしいまちづくりが求められていきます。「Society 50」の時代、SDGsが推進され、平和社会、福祉社会、多文化共生社会、情報通信社会等、価値観の多様化が進み、社会は様々な人々によって構成されていきます。

大きく時代や社会が変化する中、学校教育で最も大切なことは、将来を担う子供たちの教育目標です。そして、その目標を実現する教育内容を考え、その内容を指導する方法を子供たちに応じて検討し、実践することで、社会にいきる教育は進化していくものと信じています。

◆令和二年度

各部会・委員会刊行研究集録

理科 みかわの理科教育いま(第40集)
音楽 三河の音楽教育
造形 令和2年度
子どもの思いが広がる造形教育
技術・家庭(小) 研究のまとめ
英語(外国語活動)
2020英語教育研究集録第58号

学習情報 三河の視聴覚教育
愛知県へき地教育
研究シリーズ第44集

ふるさとに夢や誇りをもって、
未来の創り手となる子どもの育成(2)

編集後記



ここに令和二年度の最終号をお届けいたします。貴重な原稿をお寄せいただいた皆様、心よりお礼申し上げます。また、「教育みかわ」をご愛読くださった皆様、ありがとうございました。

会員の皆様にとって、日々の教育実践に役立つ会報誌となるよう、一層取り組んでまいります。

表紙の写真

「運動会親子競技『台風の目』」

撮影 新城市立庭野小学校

荒川 文晴 先生

カット

愛知教育大学附属特別支援学校

田中 千晶 先生